

## 五 資料調査の成果

はじめに

江戸時代を通じて越中の東本願寺派（現真宗大谷派）の触頭寺院であった善徳寺には、加賀藩前田家との関係を示す貴重な調度品をはじめとする美術工芸品や真宗史料が所蔵され、その一部は富山県指定文化財として知られている。そのほかにも絵画・彫刻・什器類が数多く残され、かつ保存の状態も良い。これらについては、平成一七年度から一九年度に行われた歴史資料悉皆調査によって精度の高い「善徳寺歴史資料目録」が作成された。

また、蓮如などの書跡、由緒をはじめ、触頭として多くの寺院を統括していたことから、本山や加賀藩、末寺等の往復文書や法会、経営関係の文書など膨大な量の近世文書資料がある。これらは、昭和五四、五五年度に富山県教育委員会によって「古文書緊急調査」が行われ、『城端別院善徳寺史料目録』が発行された。この調査をうけ、調査報告書に記載された書跡、古文書、冊子類、合計五九九六件（九三〇九点）が「城端別院善徳寺文書」として昭和五八年に県の文化財指定を受けている。

このほかにも、未整理ではあるが、近代以降の文書等が保管されていた。

これらの膨大な資料類のなから、建造物の普請や構造、破損等の記録が記載されたものを抽出して変遷等を追うとともに、建造物の詳細調査で見られる痕跡等を裏付ける資料を探し出すこととした。

### 既往調査資料

善徳寺を構成する諸建築については、これまでさまざまな調査や研究が行われている。これらの調査結果を踏まえながら詳細調査を進めることとし、調査内容や資料を整理することからはじめた。

まず、昭和五六年に富山県教育委員会が行った『富山県近世社寺建築緊急調査』がある。太鼓楼・台所門・式台門・山門・本堂・鐘樓の調査が行われ、太鼓楼は方二間・重層・四注造銅板葺、台所門は正面九間・側面三間・切妻造平入・棧瓦葺、長屋門、式台門は一間一戸・四脚門・切妻造平入・前後向唐破風付・銅板葺、山門は三間三戸重層八脚門・山廊付・本瓦葺・山廊棧瓦葺、本堂は正面七間・側面二間・

入母屋棧瓦葺・向拝三間付、鐘樓は方一間・入母屋造・銅板葺、と報告されている。その後、平成六年、富山県教育委員会の『富山県近代和風建築総合調査』によって、明治二一年に上棟された経蔵の調査が行われ、桑山石（凝灰岩）基壇・方一間身舎に方三間裳階・棧瓦葺・漆喰壁、と報告され、県内でも稀有な輪蔵（八角形）、との考察がされている。

また、平成六年には、金沢工業大学の土屋敦夫教授（当時）によって「善徳寺の建築物及び絵図面の調査」が行われた。各時代の絵図面八点の検証とそれを基にした建築物の調査で、伽藍内の建築物の変遷を明確にした調査である。

使用した絵図面八点は、「城端絵図」（一七二六）、「善徳寺絵図」（年不詳）、「伝宝曆善徳寺絵図」（図には宝暦とあるが、当時ないはずの現山門が描かれている）、「伝文久善徳寺絵図」（後に嘉永年中の絵図と判明）、「山門・式台門設計図」（一八世紀末）、「明治平面図」、「平成平面図」、「屋根葺替絵図」（一八五九〜一八六一）で、各建造物や部屋等が、各絵図面にどのように描かれているかによって、増改築や修復の流れを網羅している。なかでも、太鼓楼、式台、対面所、台所門、（大納言の間）については、現在の建物が享保一一年（一七二六）の城端絵図に描かれていることが示された。平成一一年に善徳寺が発行した「善徳寺史」には、この調査について加筆修正されたものが「城端善徳寺の諸建築と絵図」として掲載されている。

なお、旧城端町や善徳寺所蔵の古文書類については、長年、文化財保護委員や善徳寺宝物館職員を務めた齋藤耕三氏が詳しく、平成一六年に城端町が発行した『城端町の歴史と文化』には、氏による「善徳寺伽藍」が掲載され、善徳寺所蔵の近世文書の中から、本堂上棟までの勸化依頼文書の紹介と庫裏が明治三〜一〇年の間に現状の形になったという考察が示されている。

図面類の作成については、昭和五九年に宝物収蔵館建築の確認申請のために全体平面図を作成したのをはじめとして、昭和六三年には、当時町指定文化財であった善徳寺建造物を県の指定にするための資料整備として、山門の一階・二階平面図、正面・側面立面図・断面図（一／五〇）、鐘樓の平面詳細図、東側・南側立面図、縦・横断面図、天井・屋根伏図（一／三〇）が作成されている。

平成五年には、先述の土屋教授の調査に先立ち、当時（財）文化財建造物保存技術協会の上野幸夫氏・戸石久徳氏の実測、金沢工業大学建築学科土屋研究室図による全建造物の個別平面図（一／一〇〇）が作成され、同時に城端町が作成した善徳寺測量平面図（一／二五〇）に個別平面図を縮小して張り込む形で建物配置図が作成されている。



今回の調査において、平成五年作成の測量図を基に境内地を再測量し、デジタルデータ化した。各建物の角を測量して建物の軸を明確にすることによって、建物の建築年代の違いを明らかにした。

## 文献史料

文献の調査として、調査委員の協力をあおぎ『城端別院善徳寺史料目録』の「二、古文書目録」から「普請・作事」の項に分類されている古文書を確認した（表3）。六七件、九四点の史料があったが、これらは既によく知られている古文書であり、今回、特に新たな発見は得られなかった。

しかし、「普請・作事」の項以外の「三、冊子類目録」に「（城端善徳寺台所営繕方等二付御断）」（三（一）一四七七）があり、この文書は年不詳ではあるが、内容から、明治の初めころに大風による破損のため、庫裏（台所）の規模を縮小したことがわかる貴重な史料であった（普請関係史料抄 史料八）。

そのほかに、今回、新史料として、大納言の間の襖を張り替えた際に発見された下張り史料を六二点確認した。年号がわかるもので、明和年代から明治七年までの文書が確認された。

また、市指定文化財「畑文書」の中の一冊である『落葉拾遺』には、宝暦九（一七五九）年の段に、庫裏について「三階建ての庫裏が建築されたが、翌年の大風によって揺らぎ、危険なので三階部分を取ってしまった」という意の記述がある。

建築年代等に関係する主な文献史料については、部分的に翻刻し、普請関係史料抄として掲載した。

## 絵図・図面資料

先に行った歴史資料調査によって、善徳寺に関係する絵図類は一四点確認されている。「大門設計図（壹）」（五）は、城端大工組合員が所有していた設計絵図面が軸装されており、文化年間に山村與四郎によって朱書きされたという「大門設計図（壹）」を含んでいる。明治二八年作成図の写しである「善徳寺境内絵図（一）」には、本紙右上に「明治廿八年御達ニ基キ富山縣廳へ／曾出シタル城端別院見取繪図ノ之写」とある。「善徳寺境内絵図（二）」はこれまでの調査で「配置平面古図」としている絵図で、江戸時代後期の図面だが、その時期にあるはずのない建物同士が同じ図面上に描かれており、山門・式台門の設計書に付随する配置予定図と考え

られる。「善徳寺境内図」は、木箱の蓋に「善徳寺古圖 寛保年間」と書かれている。そのほか、個別の図面として「城端別院菊門図面」（今堀佐七郎作）や「大門敷石等図」がある。

個人所有では、城端塗の小原治五右衛門家が所有している「城端御坊全景図（伝宝暦年中）」・「城端御坊全景図（伝嘉永年中）」がある。特に「城端御坊全景図（伝嘉永年中）」は、善徳寺が発行した印刷物『教如上人と空勝僧都』に「文久年間城端御坊全景図」というタイトルで掲載されていたため、長年、「伝文久善徳寺絵図」と呼ばれていたが、内題には後世の手であるが「古代城端別院全景図 嘉永年中九代之祖治五右衛門雄藏畫」と記載されているのを確認した。

今回新たに確認した図面は二点である。一点は、南砺市立城端図書館に寄託されている洲崎文書の中にあった、善徳寺の間取り平面図「御坊平面図」である。この絵図には年号等の記載はなく、紙質や記載されている文字から近年の写しであることがわかるが、描かれている山門が旧山門であることと、台所門付近に天明三年（一七八三）の文書にも名がある寺役人の「吉村多仲宅」があること、本堂は現状と同じであること等から、寛政期に描かれたものであると確定した。

二点目は、今回の調査で宝物館の段ボール箱に無造作に納められていた断簡の中から見つかった、庫裏の屋根の規模を示した図の一部である（口絵写真参照）。これは、「城端御坊全景図（伝嘉永年中）」のみに描かれていた規模の大きい豪華な庫裏を裏付ける資料として大きな発見であった。そのほかにも絵図の一部とみられる断簡が多くあり、嘉永期の対面所周辺の改修および新御殿新築の計画図や参考資料と思われるものもあった。



## 2. 普請・作事

史料番号	題 名	年 月 日	(西暦)	形 態	通数
2024	善徳寺御堂再建に付本山より勸方願(上部欠)	寛保3年3月	1743	一紙	1
2025	御堂再建のため懇志願に付上申書	寛保2年	1742	一紙	1
2026	城端御坊御堂再建に付書状	8月24日		統紙	1
2027	御坊御堂成就に付御遷仏供養案内状	8月		統紙	1
2028	城端御坊御堂再建成就の御礼金上納に付礼状	11月12日		統紙	1
2029	城端御坊普請入用銀借用書	嘉永2年6月	1849	一紙	1
2030	普請方入用貸渡利息銀受取覚	嘉永2年9月2日	1849	包紙・一紙	4
		嘉永3年3月4日	1850		
		嘉永3年12月	1850		
		嘉永4年4月	1851		
2031	借入銀の件に付頼状	安政5年2月	1858	袋綴仕立	1
2032	御普請方銀子調達に付返書	2月23日		統紙	1
2033	銀子才覚に付書状			切紙	1
2034	城端御坊へ上納に付覚			長帳仕立	1
2035	御座敷普請に付奉加銀並に米指上等申上書(前・後欠)			統紙	1
2036	御坊屋根修葺代等に付願	子2月		統紙	1
2037	勝手廻り惣普請入用残銀支払に付証文写	子4月5日		統紙	1
2038	宮道屋小左衛門等屋根板増願並に造用支払願	酉6月9日		統紙	1
2039	普請勘定覚(後欠)			統紙	1
2040	城端御坊御堂等修葺のため懇志取持に付申達状	12月18日		折紙綴	1
2041	城端御坊所修葺助勢取持に付依頼状	辰7月		箱入・折紙	1
2042	御坊所修葺に付取持方請書	11月朔日			4
2043	寺堂修葺普請の動化許可願	宝暦4年10月写	1754	一紙	1
		宝暦4年10月	1754	統紙	1
2044	寺堂修葺普請の動化に付再願	宝暦8年11月5日	1758	統紙	1
2045	御堂再建動化並に宝物拝礼に付承知の旨申達状	2月19日		統紙	1
2046	御堂屋根葺替のため御寿像並に御真影巡在に付案内状	未3月		統紙	1
2047	御堂等屋根葺替のため御真影巡在に付願	5月		統紙	1
2048	城端御坊修葺のため宝物弘通に付書状	巳4月		統紙	1
2049	善徳寺門修葺宝物弘通免許状写	6月		折紙	1
2050	城端御坊宝物弘通越後一国免許一件	辰7月		折紙	1
2051	城端御坊御堂内陳修復に付演説書付	亥7月		包紙・統紙	1
2052	城端御坊御堂修葺の速忌執行に付書状	12月18日		折紙	1
2053	城端御坊台所其外建物修理に付書状	7月17日		折紙	1
2054	表御殿修葺並に塗り図り書	酉8月4日			2
2055	善徳寺普請請書(御殿普請請書・客座敷普請請書)	嘉永2年3月13日	1849	一紙	2
2056	住居普請の地面減少方に付書状	12月28日		統紙	1
2057	御坊御堂屋根破損修理に付書状写	6月19日		統紙	1
2058	御坊御堂並に屋根修復に付書状	辰7月		折紙	1
2059	御坊御堂屋根銅板作の覚			袋綴仕立	1
2060	御坊鐘楼造営上棟儀式等に付書状写	(元禄7年)閏5月19日	1694	統紙	1
2061	鐘衝堂屋根修復に付書状	未4月10日		一紙	1
2062	御坊鐘楼再建等並に柱立に付書状	8月12日		統紙	1
		8月18日		折紙	1
2063	御坊鐘楼再建に付書状	5月晦日		箱入・包紙・折紙	1
2064	御内意の仕職住居造立に付口上書	嘉永元年8月	1848	統紙	1
2065	普請場所並に普請日・普請人等覚			長帳仕立	1
2066	善徳寺本堂修理用材木の金印許可願	延享5年7月	1748	一紙	1
2067	本願寺より用材運送一件				7
	用材送り状写	閏7月26日		袋綴仕立	
	材木船積送に付書状	閏7月26日		統紙	
	用材送り状	閏7月26日		切紙	
	越中行材木運賃覚	(天保6年)7月	1835	切紙	
2068	善徳寺普請松木掛鎖に付申渡書	己酉3月		統紙	1
2069	材木引立に付書状	閏4月朔日		統紙	1
2070	材木運び方に付書状	6月15日		統紙	1
2071	普請方相談に付参坊依頼状	11月16日		切紙	1
2072	鋳場より鐘寺入に付覚(後欠)			統紙	1
2073	御坊御殿金箔御用に付入用金図り書上	未11月		統紙	2
		未12月12日			1
2074	彫師の引合に付書状	申10月17日		統紙	1
2075	善徳寺門再建に付大工柴田新八郎願			統紙	2
	逗留願	文化元年6月	1804		
	逗留延期願				
2076	大工与八庭内にて気絶の沙汰一件				4
	与八気絶候に付申上書	巳6月22日		一紙	
	与八気絶に付書状	6月22日		統紙	
	与八の持病御尋に付返書の添状			一紙	
	与八癩病の件に付申上状下書	6月		一紙	
2077	大工賃料等書上覚			長帳仕立	1
2078	作事人足賃請取状	酉3月18日		一紙	1
2079	作事見積書	酉3月		切紙	1
2080	作事覚			長帳仕立	1
2081	作事入用覚			長帳仕立	1
2082	善徳寺大門下敷石細工場にて盗まれ物届書	巳10月		切紙	2
2083	石細工代銀書上覚(前・後欠力)			長帳仕立	1
2084	懇所境内の大垣修葺に付達書	天保11年5月	1840	切紙	1
2085	善徳寺掛所普請残銀一件				3
	未払に付訴状	延享元年10月14日	1744		
	未払に付寺社奉行宛取斗方願状	延享2年2月23日	1745		
	未払に付届状	同年2月			
2086	寺院平面図			袋入・一紙	1
2087	寺院建物指図			一紙	2
2088	客殿ササノ間等絵図			統紙	1
2089	台所門絵図に付追伸文			統紙	1
2090	速成院殿御葬嚢十分一の絵図	嘉永4年12月10日	1851	統紙	1

表3 『城端別院善徳寺史料目録』「普請・作事」の項の古文書一覧

普請関係史料抄

史料一

「廓龍山善徳寺譜略記」(善徳寺文書一(二)(二))

(前略)

元和四年<sup>戊午</sup>八月鐘鑄造作大式尺五寸

(中略)

寛永十年御堂再興矣

(中略)

延享三年<sup>丙寅</sup>八月堂新始矣

(中略)

同(宝暦)九<sup>卯己</sup>年八月十一日御堂成就<sup>丙寅新始、至于今歲十五霜</sup>上棟儀式御棟札御使僧守来頂戴、同九月廿一日御入仏供養、一座大会、同十月十六日鐘鑄<sup>林道村於裏野造鑄之大三尺六寸</sup>同廿三日

引到于寺中

史料二

「城端善徳寺由緒略書」(善徳寺文書一(二)(九))

越中国砺波郡山田郷城端善徳寺由来拔書

開基本願寺第八世信証院殿<sup>進如上人</sup>也、文明年中信証院殿北陸御經廻之砌、加州河北郡伊賀庄砂子坂村周覚法印草庵之旧地ニおゐて建立在之、蓮真法印江御附屬之御事、

(中略)

文亀年中、加州砂子坂村より越中山本村江移住

(中略)

天文年中、山本村より福光村江移住

但、城端江移転之後、福光村坊跡を以為掛所、于今相續仕候

(中略)

永禄二年、城ヶ端城主荒水大膳之請ニよりて福光村より城ヶ端江移住、則大膳より安置仏阿弥陀如来<sup>惠心僧都御作</sup>并城門等寄附、

(中略)

一、第六世顯証院空勝僧都、顯示院祐勝僧都女聲、越前石田西光寺男、元亀元年九月より大坂御坊戦之砌、不惜身命御取持申上、加越能組下江申談、兵粮等被致運

送、且五ヶ山焰硝玉葉御寄進在之候事、

(中略)

慶長九年八月 瑞竜院様御巡狩之砌、当寺二夜御止宿<sup>御座之間于今有之候</sup>其節八折小屏風<sup>八嶋</sup>壹双并御膳具<sup>御紋附</sup>拝領仕、于今所持仕候、且地面御寄附、御直書被添候

(中略)

宝暦九年八月十一日、御堂成就二付、棟上儀式御棟札御指下、御使僧守護有之候

棟札左之通、

大谷本願寺越中国城端末刹 前大僧正從如再建、

宝暦九年<sup>卯己</sup>八月十一日 願主<sup>眞誓眞勝</sup>

(中略)

天明元年鐘樓堂再建有之候事

(中略)

追加

寛政十二年閏四月、大門新始、文化六年十月、大門棟上儀式有之

右等之外、靈宝并御寺国法、御代々様御書等伝来御座候得共、省略仕申上候右、亮磨殿御住職被仰出候二付、当寺御由緒御次より御尋之段、御広式より被仰渡、翌年書上候写

史料三

「御堂再建のため懇志願に付上申書」(善徳寺文書二(二)(二〇二五))

乍恐以書付奉願候

当春二月廿七日、大風吹御堂大二損シ傾キ申候、柱根等朽候故、可致修覆様無御座候、□□先達而御注進申上候処、被達御聴候趣御□□被成下、慎而奉拝受候、就夫、当御坊附加越能三ヶ国御門末中江及示談申候得者、当時困窮之世上ニ御座候間、取類御成就難申候、此□□僧俗心を合、自他之懇志を相願、一ヶ月壹人三銅之講錢取結(中略)

越中国城端御坊<sup>守護職住持職</sup>善徳寺 快道

寛保式年何月何日

御家老衆御中



史料四

「寺堂修覆普請の勸化許可願」(善徳寺文書二(一)二〇四三)

奉願口上之覚

一、当寺御堂、凡年来百七拾年斗ニ罷成、柱根等朽損、風雨之砌、別危御座候ニ付、修覆仕度、古御堂取毀普請取懸申候得共、自分門徒迄ニ而ハ中々再建難仕御座候ニ付、御領国加越能勸化之義、奉蒙御許容度願上之申候、就夫、当寺由来之儀少々左ニ申上候

(中略)

宝暦四年十月

城端 善徳寺

前田主殿助殿

伴 八矢 殿

不破彦三 殿

史料五

「寺堂修覆普請の勸化に付再願」(善徳寺文書二(一)二〇四四)

当寺本堂造立以来、百年余ニ相成、及大破候ニ付、先住再建之儀存立候処、自他門徒助力迄ニ而ハ成就難仕候故、御領國中勸化之義奉願度内存ニ御座候所、病氣指出、不遂功終致死去候、拙僧義後住職本山より被申渡寺務仕、右再建之儀、先住志を継存立候処、門徒共助成ニ而ハ成就難仕候ニ付、宝暦四年十月、御領國中勸化之義、書付を以相願候処、右書付御請取被下候得共、于今御沙汰無御座候、然処、近年段々門徒共助成を以普請仕、来春迄ニ柱立ハ仕申図ニ御座候得共、屋祢葺可申様無御座候、近年之内、祖師五百回忌指向申候、右遠忌法事、一宗寺庵相応致執行申候、右法事前、屋祢出来不仕候而者、必至与指岡申儀迷惑仕申候、御時節柄、御難題成儀ニ御座候得共、当寺代々越中触頭役茂相勤申候間、先年相願置申通御許容被成被下候様ニ、何分宜被仰上可被下候、仍重而書付を以相願申候、以上

宝暦八年十一月五日

善徳寺(印)

伴 八矢 殿

不破 彦三 殿

大音七左衛門殿

史料六

「落葉拾遺」(城端図書館蔵畑文書)

宝暦九年

(中略)

御坊棟上式 九月廿日御遷仏式

九月十六日 釣鐘無事釣リ終ル 廿三日撞初式

台所普請ナルガ、二階迄出来シガ、三階ノ普請トナリテ木材ヲ運ブニ、二階迄花道ヲ作り、牛ノ背ニ木材ヲ載セテ運ビシナリ、其レガ如何ニモ目新ラシク、町中ノ人ガ大勢見物セリ、此三階モ首尾能成就セリ、如何ニモ高ク誠ニ立派ナル建物ナリシガ、其翌年三月、以テノ外ノ大風トナリ、三階ヲ揺リ動シ、今ニモ吹き飛ブカト怪シマレ、二階モ共々動キ方ガ烈シク危険極マレリ、此俟ニテハ保チ難ク、相談ノ上、三階ヲ揺ギ取ル事トナリ、惜シクモ今ノ二階迄トナリシナリ

史料七

「善徳寺門再建に付大工柴田新八郎逗留延期願」

(善徳寺文書二(一)二〇七五)

善徳寺門再建ニ付、京都本山棟梁大工柴田新八郎被指下、門惣絵図等引立、普請取懸罷在候所、右新八郎儀逗留那永ク相成候間、一先相返候様、当六月被仰渡、(中略)此度重而被指下当廿二日参上仕候ニ付、別紙書付を以御届申上候処、逗留之義、御聞届難被下旨被仰渡、右書付御返被相成候、右新八郎儀、近来井波瑞泉寺本堂再建之節も被指下候而、始終新八郎指図仕、全成就も仕ニ付、今度善徳寺門惣絵図も新八郎引立候而、近々木図リ等も仕筈ニ御座候所、当時少々ならて出来不仕義ニ御座候、前段之之通、余人申談候与茂相弁不申、先達而墨引相済居申分ハ、職人共近々作事取懸居申候得共、其余之分ハ如何取斗可申様無御座候、左候得ハ、右願之趣御聞届無御座候而ハ、善徳寺門再建成就茂難斗、甚辛勞至極仕候、且門徒之者共、甚相歎罷在申候間、何卒格別之御詮義を以て逗留被仰付被下様仕度奉存候間、幾重ニも御憐察を以御聞届被下候様、重而奉願上候、以上

文化元年八月

寺社御奉行所

善徳寺就無住

看 坊

史料八

「城端善徳寺台所管繕方等ニ付御断」(善徳寺文書三(一)一四七七)

私共義、往昔より善徳寺旦家并講中ニ御座候処、一昨年来善徳寺より依頼相続向示談方等仕罷在候処、善徳寺先住より兼而申聞之趣有之、広間并ニ台所向棟高之処、大風之節、甚以危キ候ニ付、取払候様被申聞、取払方治定ニ相成、則右取払方相談ニハ肝煎講松本才喜・伊東市曹・林庄兵衛・得能小四郎・伊藤祐明・中田清兵衛・小竹六郎兵衛・吉崎治郎作・長谷川文右衛門町方諸講中、近在講中詰合、私共為打合取極置申候所、去ル五月三日之大風ニ而台所之屋根吹損シ、大破ニおよひ無廻修覆ニ取懸リ候処、少々古木不用之品在之候ニ付、町在講中打寄、又々示談之上、從來古道具商業之者共打寄り、右古木売呉候様私共江及示談候、(中略)

門徒田屋村 田矢守近

講中天池村 藤井市郎

同 信末村 中山長兵衛

同 北野村 岩井藤三郎

門徒野口村 田嶋与三郎

門徒原 村 大浦庄助

第二十五大区

区合所 御中

史料九

「荒木氏旧記」(城端図書館蔵洲崎文書)

宝曆(九)己卯年(中略)

九月五日善徳寺撞鐘直シ新シク出来□□、鋳物師福野永井藤吉(中略)

宝曆十二壬午年(中略)

四月廿二日迨夜ヨリ同廿八日中マテ善徳寺祖師上人五百年忌大法会御執行、現住一位殿欣求院ト号ス、御儀式御本山へ御願之通り御免許、則行堂音楽之僧ハ勢州桑名之楽人僧御本山ヨリ御雇ニテ御下シ被成、外之御坊ニ超越之御法事ニテ、隣国迄伝聞、加越能三ヶ国ハ不及申、越前越後ヨリ参詣之者モ有之、当所へ入込申群集夥キ事ニ候、然レトモ始末静謐無難ニ御満座被成、当所建始以来是程之群集繁昌之形勢ハ無之事ニ候、御法事中之義、委曲別紙ニ相認メ候

(中略)

明和八年辛卯年(中略)

五月七日御坊鐘楼再建之新初メ有リ、儀式等御堂新初ノ如ク嚴重ナリ、又仮舞台ニテ若輩ノ者申合、町々ヨリ役者相撰ミ出歌舞伎ヲ興行ス、本朝廿四孝淨溜利五段続ヲいたし、装束道具等見事ニテ大出来ナリ、諸人目を驚し見物セリ